

《話題提供》「現場に役に立つ」研究について考える

日本社会事業大学大学院博士前期課程2年/（株）京急ウィズ（京浜急行電鉄株の特例子会社） 上村 勇夫

- 調査初心者として。また現場実践&研究、両方従事している者 という立場からの話題提供。アドバイスを！
- 私の現場：障害者雇用の職場。特に知的障害者とともに働く一般従業員に着目。

【「現場に役に立つ」テーマ設定の難しさ】

- ある教授曰く、『これからの社会福祉学は「分析科学」だけではなく、「設計科学」でなければならない』と。（社会福祉学の固有性を意識して、分析化学だけなら社会学と変わらない、と）
- 私の修論（来年：2011年1月提出予定）テーマ設定の経緯

テーマ案	問題点
①一般従業員の満足度調査	●医学系出身の同期に触発され、量的調査に固執。既存の尺度の選択に終始するが、満足度を問うだけでは不十分なのでは？
②OCB（組織市民活動）	●「他分野の専門家が作った精密な顕微鏡を扱える？それで複雑な現実を見ようとしても無理があるのでは？」
③倫理に関する意識調査	●「現場での調査が難しいのでは？」との指摘。この頃から仮説生成的アプローチへ考えがシフト。
④チームワーク要素に関する聞き取り調査	●チームワーク、コミュニケーションといった概念が曖昧なのでは？

○最終的なテーマ設定

【テーマ】知的障害者とともに働く特例子会社の一般従業員の困難感について

—テキストマイニングを用いた自由記述回答の分析および関連要因の探索—

【目的】知的障害者が雇用されている特例子会社の一般従業員の日常的な関わりにおける困難感の実態を明らかにし、さらにその関連要因（役割認識、支援経験、基本属性等）を探索的に明らかにする。

【方法】特例子会社の一般従業員を対象にアンケート調査（11社、60名分回収済み）①困難感：自由記述回答。②役割認識や支援経験、その他基本的属性（立場、就業形態、業務内容、障害者雇用関連の資格、性別、年齢、勤続年数）

【意義】

- ①一般従業員の困難感＝人間関係への影響⇒実態を踏まえた対策を検討することができ、知的障害者の就労継続への貢献
- ②一般従業員の困難感＝一般従業員の問題意識⇒効果的な人材育成・研修のあり方を構築する際の検討材料の提供
- ③一般従業員の役割、機能に関する提案

【研究と現場の乖離？エピソード】

- アンケート依頼は会社にたくさん来るけど通常は全く協力しないという会社が多い。なぜ非協力的？
- アンケートをお願いしたところ、途端に「よそ者」といわれる。「よそ者」＝「研究者」？
- 既存の尺度による5件法のアンケートに対して：「このようなアンケートでは回答が先に出ているようなものです。研究者として一番簡単な方法であり、真実が見えてこないやり方であり、集計、報告が容易ですが、稚拙な方法に思える」
- ある調査『「研究者や専門家の発信にとらわれず新鮮な目で見て欲しい」：「知的障害者は単純繰り返しに向いている」という発信が職域を狭めてきた。』

⇒現場に寄り添い、そのリアリティを反映した研究が「役に立つ」研究への第一歩では？現場と研究両方に携わる者としては最近フィールドワークに関心があります。

【議論したい点】

- 別紙参考資料参照。
- 皆様のご経験、ご意見をお聞かせください。
 - 現場と関わり合いはどのようなレベルですか？（cf. 3つの軸のレベル）
 - 「トランスローカルな知」を創造できていますか？
 - 「現場に役に立つ研究」についてどのようにお考えですか？現場に関わる研究者のあるべき姿は？
 - 社会科学の分野での「現場に役に立つ」先行研究は？

《話題提供》「現場に役に立つ」研究について考える

日本社会事業大学大学院博士前期課程2年/ 榊京急ウィズ(京浜急行電鉄株の特例子会社) 上村 勇夫

【『実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ』(※) 第4章「研究を進める—実践としての研究」(P51~P70)より引用】

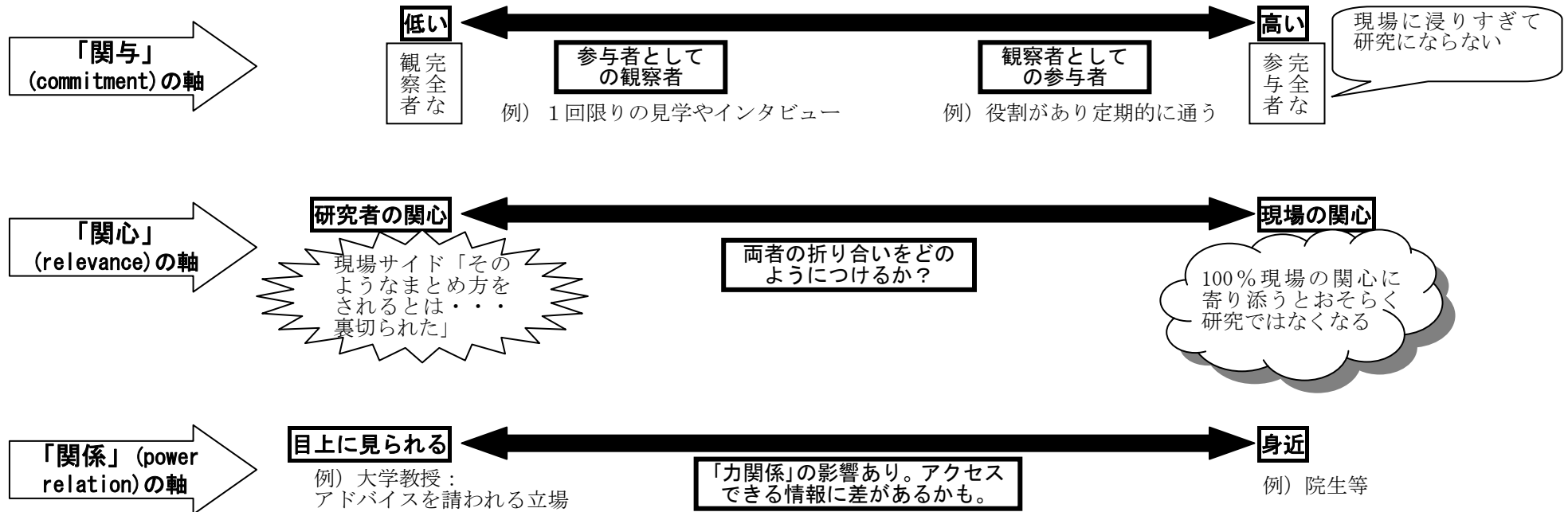
○フィールド研究に携わる研究者が抱える「二重の困難」

- ①役割葛藤:「研究者であること」と「現場の一員であること」:「二重のわらじに」引きさかれる経験
- ②フィールドへのフィードバック。フィールドワークの経験を研究者のコミュニティだけでなく、現場の人々にも享受してもらわなければならない。

○フィールドワーク研究の本質:2つの世界を絶えず往還すること

「2つの世界を行き来することを通じて新たな自分に気づき、知的な努力を継続的に積み重ねることで新たな学問的知識を生み出しうる人、それがフィールド研究に求められる人物像である」

○研究者と現場との関わり合いの3つの軸



○どのように貢献しうるか? 「(社会的に)役に立つ」とは?

- 「目指されるべきは、研究者コミュニティのみならず、現場にも何らかの貢献をもたらすような種類の知を立ち上げること」
- 「トランスローカルな知」を創造してこそ研究者としての役割が全うされる:「ローカル(局所的)な文脈を超え、ある広がりをもった状況下で普遍的に通用する理論的知識」 (例)「しんどい子に学力をつける7つの法則」 ⇒ 現場教師から「私たちがやってきたことは間違いでなかったことがわかった」

※小泉潤二, 志水宏吉『実践的研究のすすめ 一人間科学のリアリティ』有斐閣, 2007年07月